



英文学会通信

第120号

— 日本大学英文学会 —



発行：日本大学英文学会

〒156-8550 東京都世田谷区椚上水3-25-40

日本大学文理学部英文学研究室内

Tel. : 03-5317-9709

E-mail : esanu02@gmail.com

《ご挨拶》

副会長挨拶 日本大学英文学会副会長 隅田 朗彦 2

《特集》英文学会に所属する先生方へのインタビュー

日本大学文理学部教授 隅田 朗彦 英文学科3年 小澤 優月 3
 英文学科3年 塩澤 拓幸

日本大学文理学部准教授 堀切 大史 英文学科3年 田原 希優 4
 英文学科2年 横田 涼

日本大学文理学部教授 牧野 理英 英文学科3年 秋元 優志 7
 英文学科3年 高橋 尚吾

日本大学文理学部教授 マイルズ・チルトン 英文学科3年 樋口 康平 8
 英文学科3年 鈴木 大翼

《エッセイ》

博士後期課程の院生として過ごす、この贅沢な日々について
 日本大学大学院博士後期課程3年 岡 麟太郎 10

アメリカ文学との出会いと教員生活を振り返って 日本大学文理学部教授 高橋 利明 10

《検定試験奨学制度》

私と英語 日本大学文理学部英文学科3年 若林 花音 11

《年次大会プログラム》

《年次大会発表要旨》

証拠性の観点から見た知覚動詞の受動態と原形不定詞の意味的非整合性について
 日本大学文理学部助手 村岡 宗一郎 13

could not と was/were not able to の試行の有無 日本大学文理学部講師 島本 慎一郎 14

メルヴィル、ホーソーン、そして海と陸のユートピア

—IshmaelとZenobiaの「手」をめぐる— 日本大学文理学部教授 高橋 利明 14

《月例会関連》

《事務局だより》

《ご挨拶》

ご挨拶申し上げます

日本大学英文学会副会長 隅田 朗彦

本年度より副会長職を拝命いたしました。微力ながら学会の発展に力を尽くしていく所存でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。さて、私が日本大学英文学会に入会したのは英文学科に着任した2014年4月で、私の会員歴は今年度で10年目ということになります。副会長として仕事をするにはまだまだ浅い経験ではございますが、少しでも学会発展への貢献ができればと考えております。

私の専門とする研究分野は英語教育で、私の主な研究テーマは英語学習者のライティング力の発達を促す訂正フィードバック法です。長い間、外国語で「書くこと」や「話すこと」は、「読むこと」や「聞くこと」あるいは文法・語彙学習によってある程度の知識が備った先にあるものとされてきました。しかし近年では、多くの誤りを犯しながら「書くこと」「話すこと」を続けることこそが正しい言語の習得を促進するという理論へと変化しています。そこで、学習者が書いたものに文法・語法的な間違いがあったら修正を促し、もう一度書かせるというのは、書くことの指導の中核となります。しかし、修正を促す、一般的な言い方をすれば、添削をするという行為は指導者にかなりの労力を強いてきました。生徒の書いたエッセーに本格的にフィードバックをしようとすれば、一クラスに数時間かかることは珍しくありません。実際にそのことを理由に英作文指導を敬遠する教員も少なくありません。そこで私は、そのような労力を軽減しながら、できる限りの言語習得成果をもたらすフィードバック方法を探すことを研究テーマとしてきました。

ところで、この通信が発行されるのは11月ですが、ちょうど1年前の11月にChatGPTが世に出たことで各所に衝撃が走りました。今年度は多くの学会でもAIの活用がディスカッション・テーマとして取り上げられています。AIの技術は今後の私たちの職業や日常を大きく変化させると言われていますが、ChatGPTなどの自動生成ツールや自動翻訳、自動採点ツールは、ライティング指導やライティング学習の在り方を大きく変える存在になっています。これまで大変な労力をかけていた修正フィードバックは、AIの自動採点ツールを使えばごく短時間でできるようになりました。したがって、私の研究の動機でもあった指導者の労力の軽減については、ある程度まで実現されつつあります。学習者が英文を生成することについて

でもAIの助けを借りることが容易にできるので、ライティング指導の様相を大きく変える必要性も出てきました。ただ一つのツールが指導学習方法を変化させ、その研究の方法論にも変化が要求される事態になっています。

会員の方々の中にはすでにこのような新しい変化に対応されている方も少なくないと思いますが、本学会もこのような変化に対応せざるを得なくなるかもしれません。AIによる変化の話ではありませんが、前回の学会通信では吉良先生が本学会のいくつかの変革をご提案されていました。例えば、今年度はシンポジウムを通信教育部で行い、通信教育部所属の学生さんにも本学会をより良く知っていただくとする試みが行われました。また、新しい学会通信には、編集補助員として名乗りを上げてくださったボランティア学生さんの企画が盛り込まれることになりました。このような発展的な変化を進めながら、年次大会、定例会の開催や論叢の発行などの伝統的な行事が持続的に行われることも学会の成長には欠くことができません。今後とも皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。様々な場面で皆様にお会いできることを楽しみにいたしております。



《特集》

英文学会に所属する先生方への
インタビュー

本号より新たな取り組みとして、「同窓会通信」(2017年3月より休刊)に掲載されていた特別企画を特集記事として英文学会通信に掲載することとなりました。本号の特集を編集するにあたり、多くの学生ボランティアが協力を名乗り出てくださいました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。これからも、インタビュー記事に限らず、会員みなさんに現在の英文学科や英文学会の様子が伝わるような特集をお送りしたいと思います。

隅田 朗彦先生(日本大学文理学部教授)

**聞き手：英文学科3年 小澤 優月
英文学科3年 塩澤 拓幸**

塩澤：自分を四字熟語で表すと何になりますか？

隅田先生(以下は敬称略)：答えとなる四字熟語は一つでないといけないかな？

塩澤：いえ、複数でも大丈夫です。

隅田：昔と今と未来に分けて考えると三つあって、まず昔は「八方美人」でした。やっぱり、人間みんなから好かれたいじゃないですか(笑)今の自分自身を四字熟語で表すと「泰然自若」ですかね。自分の状態というよりもなりたい自分になってしまっていますが、自分をもって何事にも動じずにいたいと考えています。また、「五里霧中」の状況とも言えます。まだ色々なことを知らない自分が存在しているので、そこを模索しているところで、今後の目標でもあります。

小澤：英語教育について研究する前と後で変わったことはありますか？

隅田：大学3年生より前は塾でしか生徒を指導したことがなかったのですが、大学で第二言語習得について学ぶようになってからは、生徒に「間違っしてほしい」と思うようになりました。間違えはいけないことと思っていましたが、間違わないと今の自分の状態について理解することができず、間違いから学ぶことのほうが多いと気づき寛容になりました。そのことは仕事以外でも当てはまることで、例えば待ち合わせに30分待ったら許せなかったのが、許せるようになりました。人を許すと自分も許せるので。振り返ると、昔は良く思われたいがために、要求されたことをやろうとして八方美人に振る舞うこともありましたが、最近は歳

をとって経験も増えて、より自然に気楽に生きられるようになりました。教育を勉強して人を思いやる心を育むことができ、昔よりも優しくなりましたね。

塩澤：休日は何をしていますか？

隅田：5年くらい前は土日仕事で少し忙しかったです。最近となっては週末に家族と過ごすようにしています。とはいえ、土曜日はセミナーや学会への参加があるので、家族との時間をもう少し増やしていきたいところです。

塩澤：旅行など遠出することはありますか？

隅田：旅行はあまり行きませんが日帰りで車で買い物等に行くことはあります。休日に特にすると言えば家事です。あと、夜寝る前には本を読むかな。今年はサバティカル休暇ですが、時間が増えたわけではありません！休暇をください(笑)

塩澤：今までで最も印象的な学生の話をお聞かせください。

隅田：最も印象的な学生はいません。それぞれが頑張っているのに特に印象的というのはないかな。強いて言うのであれば、ゼミ生と一緒に卒論を書くので印象的です。悪い意味で挙げるとしたらむしろいい加減な学生の方が印象的です。自分が受け持つ学生にはないけども、しっかりしている学生と比べると際立ってしまう。でも、本当に教員になる気があるのかなと思っていた学生が実はちゃんとやっていて成功していたということもよくあるので、自分自身で物事にしっかりと取り組んでいる学生は成功すると思います。良い意味で見かけと中身のギャップに裏切られませぬ。

小澤：自分が思う専攻分野の面白さとは何ですか？

隅田：英語教育は分からない事がたくさんあるということ。答えはあるが、その答えにたどり着くまでの道のりが長く、やっていて伸びしろが多く感じられます。また、昔から研究されている分野と違って、英語教育は何が最適なのかは人それぞれである点が面白いですね。日本人は知識を詰め込んでたくさん例を活用してできるタイプの人が多いですが、それで全員が英語が出来るようになるわけではありません。個人差が大きく、教材や指導の方法など様々なことを考えなければなりません。しかし、それは裏を返せば自分の裁量が広がって、色々とできるが増えて楽しいと言い換えることもできます。分からないことがたくさんあるから分からないことがあってもいいやと思え

界だったので、僕にとっては、はじめて学校という場所が楽しくてしかたのない場所になったんだ。空いた時間には、ひたすら本を読んで、友達とは、文学だけでなく、好きなロックバンドやアメリカ映画なんかについて語り合ったりして、とにかく大学って楽しいなっていう、そんな生活を送れるようになって。そして、そんな大学生活を送るうちに、文学だけでなく、もともと僕が趣味として楽しんでいた音楽や映画や美術なんかも文学と関わりがあって、文学と同じように勉強の対象になるんだっていうことが、だんだんとわかかってきて、ますます勉強が面白くなってきた。それでも、僕はすっかり人文学の魅力に取り憑かれてしまって、卒業の頃になっても、僕の人文学に対する情熱は止まることを知らず、もっと勉強を続けたいなと思って、大学院に進んだ。そして、大学院のあとは英文学科の助手になり、教壇に立ってアメリカ文学なんかを教えるようになり、現在に至るというわけだ。最初の頃の情熱はいまでも変わらないかな。そんな人文学をこよなく愛する人生なので、自分自身を表すとしたら、人文学者という他ないな。

田原：次に私から質問させていただきます。先生は講師生活が長いと思うのですが、良かったところと悪かったところがあれば教えてください。

堀切：さっきも言ったとおり、僕は人文学をこよなく愛していて、それを仕事にしているので、基本的に良いことばかりだな。僕が人文学をとおして、感じたり、考えたり、学んだりしたことを、授業をとおして学生たちに伝えたり、学生たちと共有したりするのはとても楽しいし、研究室で学生とおしゃべりしたり、ときには議論したりするのも楽しい。学生たちとはよく飲みにも行ったし、それから、僕のところにはよく音楽好きな学生が集まって来るので、学生が出演するライブや演奏会なんかもよく観に行ったし。楽しい思い出はたくさんあるよ。悪いことといえば、僕は、英文学科ないし文理学部という組織の一員なので、その組織を運営するための雑務やなんかも、それなりにしなければならぬんだけど、まあそのくらいかな。だから、僕は自分の教師人生にとっても満足しているし、大学教師という仕事を選んだことに対しても、何の後悔もないね。

田原：ありがとうございます。次の質問は、講師生活とは関係のないものになってしまうのですが、もし一ヶ月間丸々自由な休暇がもらえたら、どこに行っておきたいかを教えてください。

堀切：僕は人文学をこよなく愛する人間なので、大学教師という仕事に対して、そもそも仕事という感覚がありません。だから、逆に言うと、僕にとっては、休

暇という感覚もあまりない。

横田：ええっ！

堀切：まあ要するに、仕事をしている人だったら、普通は、平日は働いて週末は休むという生活パターンがあると思うんだけど、僕の場合はそれがほとんどない。僕は、基本的に、本を読んだり、音楽を聴いたり、映画を観たり、美術館に行つて絵を観たりしていれば満足なので、休みの日があっても、だいたいそんな過ごし方をしている。これってすべて僕の人文学に繋がることだ。だから、一日中寝て過ごすなんてことは、まずあり得ないし、休みの日でも、何かしら人文学に関わることをやっている、ということなんだよね。でもね、一ヶ月休みがあるということになると、僕にもそれなりに行きたい場所はあって、たぶん、そこを聞きたいんじゃないかと思うんだけど。

田原・横田：笑

堀切：僕にとって、『ライ麦畑でつかまえて』は、僕の人生を変えてくれた特別な本なので、舞台となっているニューヨークもまた、僕にとっては特別な場所になるんだ。だから、すでに何度も行ってるんだけど、一ヶ月あったら、ニューヨークの街を満喫したいかな。セントラル・パークを散歩したり、メトロポリタン美術館なんかを巡ったり、歩き疲れたら雰囲気の良いカフェに入って読書をしたり。夜はブロードウェイでミュージカルを観たりね。そんな風に毎日を過ごすことが出来たら楽しいよね。で、結局これも僕の人文学に繋がることだから、休暇というよりは、校外活動のようなものかもしれないね。

横田：英文学を研究するモチベーションは何ですか？

堀切：それは好奇心に尽きるね。そもそも僕の英文学研究の出発点となったのは、僕の人生を変えてくれた『ライ麦畑でつかまえて』という小説だったので、そのときから、文学は僕にとって人生の教科書であり、人生に欠かせないものなんだ。そもそも僕には、例えばお金持ちになりたいとか、人からよく見られたいとか、偉い人になりたいとかいった、何者かになりたいという願望はほとんどなくて、『ライ麦畑でつかまえて』に出会ったときから、もっぱら僕の関心は、何者かになりたいという目的よりも、毎日をどのように生きるかという人生の生き方にあったんだ。僕にとって、文学は、生きてゆくうえで必要な色々なものを与えてくれるものであり、だからこそ、僕は、文学をとおして、出来るだけ豊かな人生を送りたいと思っている。ヘンリー・デイヴィッド・ソローが『ウォールデン』の中で言っているように、自分が死ぬときになっ

て、自分らしい生き方をしてこなかったと悟るような、そんな後悔するような人生は送りたいくないよね。僕にとって文学は、人生の必需品であり、空気や水と同じくらい大切なものなんだ。だから、英文学研究に限らず、モチベーションとは何かと言えば、それが自分にとって生きてゆくうえで本当に必要なものであれば、モチベーションは自然と生まれるだろうし、本当に必要なものでなければ、モチベーションは生まれないと思う。そういうことなんじゃないかな。

横田：それでは、自分の生き方、哲学、考え方を英文学から学んで、それを活かしたいというところからモチベーションが生まれるということなんですね。

堀切：そうだね。もちろん、僕みたいに英文学を仕事にしている人間は、ただ自分の人生を充実させるためだけの読書じゃなくて、学生をはじめとして、世の中に対して英文学研究の成果を示さなくてはならないんだ。でもね、僕の考えでは、文学を自分自身の生き方に繋げてゆけるというか、自分自身の生き方に何かしら文学的なものがなければ、いくら学生や世の中に文学を伝えたところで、文学の魅力は伝わらないと思う。つまり、教えている本人が文学を仕事と割り切っているようでは、文学の魅力は伝わらないと思う。だから、自分自身の生き方をどれだけ文学的なものに出るか、ということだと思う。

横田：日大生の良いところ、悪いところ、なって欲しい学生像があれば教えてください。

堀切：ちなみに、いま日大って、偏差値でいうとどのくらいになるの？

横田：いや～、自分でもよくわかんないですけど、50くらいですかね(笑)。

堀切：それは真ん中くらいってということ？

横田：そうですね、大学の中だと、真ん中くらいだと思います。

堀切：それなら、階級社会でいうと、中産階級ということになるね(笑)。

横田：そういうことになりますね(笑)。

堀切：僕はね、アメリカを専門にやっているんだけど、イギリスにも興味があってね、階級社会についても考えたりするんだけど、中産階級って一番難しいんだよね。一番楽とも言えるんだけど、まあ一番難しい。なぜかと言うと、基本的に、中産階級や労働者階

級の人たちは、華やかな上流階級に憧れるようなところがあって、その一方で、上流階級や中産階級の人たちの中には、う～ん、例えば、裕福な男の子がヤンキーや不良少年に憧れるみたいな(笑)感覚で、労働者階級に憧れる人もいると思うんだけど、中産階級に憧れる人というのは、あまり聞いたことがない。中産階級こそ最良の階級だなんて言って、絶賛しているのは、ロビンソン・クルーソーのお父さんくらいなものだ。

横田：笑

堀切：上流階級は上流階級で目立つし、労働者階級も労働者階級で目立つけれど、どっちでもない宙ぶらりんの中産階級は、最も特徴がない。そういった意味で、中産階級というのは、最も難しい階級かな。僕はいままで十年以上学生たちを見てきたけど、日大生は、中産階級らしいというか、良くも悪くも、特徴のある学生が少ないという印象だよね。もちろん、これは学生によりけりなので、中には、ものすごい奇抜なファッションの学生がいたり、教師を挑発してくるような変わった学生もいたりするんだけど、大抵の学生は、いわゆる普通の学生って感じがする。思えば、僕らが英文学科で学んでいることって、アメリカやイギリスの文学でしょ？様々な文学作品に、様々な人物が登場するわけだけど、そのほとんどが変わった生き方をしているよね。そんな変わった人たちについて学んでいる英文学科の学生たちの中から、もう少し、変わった学生が現れてもいいんじゃないかと思う。

田原：それは自己主張的な意味ですよ？

堀切：まあそうだね、自己主張とか、自己表現とか。もちろん、その人の変わり方や程度にもよるけど、大学が変わった学生ばかりになってしまったら、場合によっては、学校として機能しなくなるかもしれない。けれども、もっと変わった学生が現れてくれた方が、学校や教室がもっと刺激的で面白い場所になるんじゃないかな。

横田：最後にもうひとつだけ質問なんですけど、先程おっしゃられたとおり、仕事と休みの感覚がないっていうくらい、英文学が好きだということですよ？そういう生き方はすごく憧れるというか、魅力的だなと思うんですけど、そういうことを仕事にするというか、人生において見つけるために出来ることはありますか？先生が英文学にハマったように、そういう生き方って、みんな憧れると思うんですけど、なかなか出来ない人の方が多いと思うんですよ。だから何かアドバイスがあればお聞きしたいです。

education systems, the lecture system, the Japanese thought is most common. In fact, when I was undergraduate lectures were the most common way of learning. So, the teacher would talk, and I would listen and write notes, things with the same style. And I didn't like that. I much preferred the discussion style classroom. However, I must say, discussion style classroom is more stressful for the students. Because students have to prepare, right? And have to talk. That's really hard. Because naturally I'm very shy person, and so jumping into a conversation was really difficult. Uh, but, after all I got better at it. The other key word I should say is "practice". Perhaps you remember for my class, did I not say, "This class is practice"? 覚えてる? Anyway, so, especially when you're learning English, you have to study, but you also have to practice, ok? And it's the same for, I think pretty while every subject of the university. You should think of doing things again and again and again. It's ... you know, you have to do a lot of work. And a lot of that work is basically practicing.

樋口：Thank you, and next question I ask is, what inspired you to teach literature?. Like... your motivation or the reason why you teach literature.

チルトン：I think my reason is the same as everybody else the teachers of literature, I love literature. And I thought that if I could share my love of literature, with many students as possible, that would create the kinds of exploratory active classroom that I prefer.

樋口：Ok. Thank you. The next question is, Will you tell us about the most memorable student you have ever taught?

チルトン：Wow, that's a hard question. There are so many good students. ... Can I choose more than one?

樋口：Yes, sure.

チルトン：I'll choose one, unfortunately, it is a bad one. ... No, I shouldn't say that(laugh). ... Can I go back to that later?

樋口：Yes, yes. The next one, actually, this is not a question, but,... Will you give a message to the member of the English society?

チルトン：Ok. Um... Reading and studying literature, is often seen by other people as a waste of time, however, I think that reading literature is beneficial because it's the

closest thing we can do as humans to experience another person's life. But literature is really complex. We have to first to try to understand it, then interpret it, and then try to relate it to the lives and other kind of knowledge. Studying literature helps us think systematically, and helps us think of the many different ways in which we can use literature in our lives. So that reason I think actually literature can be one of the most useful things for us to study, along with science, and mathematics, and other subjects. If people understood how hard it is to study literature and how many benefits are, I think they will see that it can be useful.

樋口：Thank you.

チルトン：Let's go back to the most memorable student. One that comes to mind. I used to teach at University of Chicago. I used to teach literature, world literature at University of Chicago. And University of Chicago is very very good school. And one of my top students in my class, decided to leave the University of Chicago. I said, "Why?". And she said, "I want to go to the university near my home in Arizona." And that university is not highly regarded as the University of Chicago. She said, "I am interested in arts, and I want to be a curator of art."

樋口：She followed her passion.

チルトン：Yes. She followed her passion, and she was seeing reality. She was the same age as you two, or younger. However, she decided to leave and took responsibility.

樋口：That is impressive. ...That's all for today's interview. Thank you for taking the time for us!

チルトン：My pleasure!



《エッセイ》

博士後期課程の院生として過ごす、 この贅沢な日々について

日本大学大学院博士後期課程3年 岡 麟太郎

大学院の初授業、心臓をバクバクさせながら一言。

「Temporal frameとは何ですか」

指導教授である吉良文孝先生に、このように質問したのは私がまだ学部4年生の時でした。大学院の授業は、博士前期課程と博士後期課程の院生が同じ授業を受けます。加えて、専門性の高い内容が対話形式で行われるため、「何を話しているのかわからない」というのが初授業の感想でした。しかし、先取り履修制度を用いて、授業参加の機会をいただいているのだから、何か発言はしようと自分を鼓舞し、捻り出したのが冒頭の質問となります。そこから約5年の月日が経過し、2023年4月、私は博士後期課程3年生となりました。ここでは、私が博士後期課程への進学を決意した理由と、そこででの生活を少しお話ししたいと思います。

「もし君が修士課程を終えるとき、学問への熱が冷めず、家族、そして指導教授がその道に進むことを認めてくれたら、必ず博士課程へ進みなさい」

特別講義の授業後、とある先生にかけていただいたこの言葉は、博士前期課程の院生だった私が博士後期課程を意識するきっかけとなったものです。その1年後、この言葉通り、何不自由なく学問を修めるまでの贅沢な時間を与えてくれた家族、そして、偉大な背中を見せ続けてくださる吉良先生のご存在により「学問への情熱」は高まり、私は博士後期課程への進学を決意しました。

今でも鮮明に覚えていることの一つに、吉良先生が論文指導の授業、開口一番におっしゃった言葉があります。

「岡君、僕から何かを教わろうと思っただけだよ。僕の背中を見て学んでね。ただ一つ言えるのは、物事の本質はいつも美しいくらいにシンプルなものだよ。」

この言葉に当時の私は驚きましたが、今ではこの言葉の意味合いが少し理解できているような気がします。物事の考え方は一朝一夕には身につかず、時間をかけていく必要があるというのは当たり前のことですが、私がそのことを身にしみて実感するには時間がかかりました。実際、私が大学院生活を通じて最も感銘を受けたのは「学者の思考過程を学ぶことの価値」といえます。例えば、*If it *will* rain tomorrow, the

match will be canceled.のように、条件節内ではwill(推量のwill)は無条件には用いられないという言語現象に対する説明原理は、学者によって様々です。同じ結論に至ったとしても、そこに辿り着くまでの思考過程は異なり、その全てが魅力的なものです。多くの学者が積み上げて成り立っている現代学問において、学者が主張する内容はもちろん、それに負けず劣らず大切なのは、その研究に対する姿勢だと気づきました。先人たちの思考過程を学べば学ぶほど、自分の視野が広がり、より優れた物事の考え方が形成されていく実感があります。このように考える学問の世界は一段と興味深く、今も私の情熱を高め続けています。

博士後期課程の生活に関していえば、修了(または満期退学)までに必要な授業単位がほとんどありません。そのため、この3年間をどう過ごすかは自分次第といえます。私の場合は、吉良先生と毎年の目標を定め、それを達成する為に日々英語に向き合っています。具体的には、1年次は、自分のテーマに関する文献を読めるだけ読み、知識を蓄える年としました。2年次からは、そこから見つけた問題に関する研究に励み、実際に学会で口頭発表3件と論文1本を執筆いたしました。そして、3年次は、さらに研究を深め、日本英語学会の口頭発表と英語語法文法学会での論文投稿を目標とし、結果として定めた目標の全てを達成することができました。現在の目標は、博士論文の執筆です。

最後に、まだまだこれからという段階ではありますが、「Temporal frameとは何ですか」という質問から始まり、今の成果と成長を遂げるまでに至ったのは、ひとえに授業や学会などでお世話になっている先生方、先輩や後輩、特に指導教授である吉良文孝先生、そして家族、多くの皆様方のご支援の賜物です。この場をお借りして心より感謝申し上げます。これからも誠心誠意、精進してまいります。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



アメリカ文学との出会いと 教員生活を振り返って

日本大学文理学部英文学教授 高橋 利明

私は、この10月17日をもって65歳となり、晴れて定年を迎えました。来年度からも授業を持つ予定ですので、定年というものがいまだどういふものかピンとはきていません。平成2(1990)年に英文学助手、

平成5（1993）年に専任講師となり、教壇に立つこと早30年が経ちました。長いようで短い30年間でしたが、授業やサークル活動（野球部パイレーツ）を通じていろいろな学生たちとの出会いがあり、日々楽しく有意義に過ごせたことに今は心から感謝しています。特に、若い頃、14組のクラス担任（13組も何度か）を長く務めたことはとても懐かしく貴重な思い出となっています。非力ではありますが、今日まで英文学科及び文理学部のためににがしかの貢献をすべく頑張ってきたのは、他の先生方や学科スタッフ、そして家族のお陰であったとつくづく思います。この場を借りて御礼と感謝を申し述べさせていただきます。

さて、私とアメリカ文学との出会いについてですが、まずアメリカとの遭遇は小学校4年の時の初コカ・コーラであったように思います。当時、自宅の近所で大学生が開いていた塾に通っていた頃に覚えたコカ・コーラの味は格別でした。特に、夏場は今ではもう見ない1リットル瓶（あるいは700ccか？）が林立していたことを思い出します。塾と言っても遊んでいたようなものですが、当時の大学生が何人も出入りしていたり、たまには外国人（アメリカ人他）がまとまってやってきたりしていたので、とても刺激に満ちた経験を持ちました。この頃、つまり小学生時代にまだアメリカ文学との出会いも、英語を積極的に学ぼうという思いもありませんでした。中学校からは英語が好きになり一生懸命学びましたが、やはりまだアメリカ文学との出会いはありませんでした。しかし、ただ日本文学との出会いはありました。それは国語の教科書で太宰治（1909-48）の『走れメロス』（1940）を読んで感動し、初めて買った文庫本『人間失格』（1948）に魅了されたという経験です。その後、高校に入ってから太宰の作品をいろいろと読み進める一方で、何かのきっかけで、アメリカ作家 John Steinbeck（1902-68）の作品をたくさん読むようになりました。また、この頃 Ernest Hemingway（1899-1961）や Erskine Caldwell（1903-87）等の作品にも触れるようになりました。そして、高校2年生の頃にはアメリカへの留学の希望が勃興しましたが、果たせずに残念な思いをしました。

大学に入り、漠然と卒論はスタインベックの『怒りの葡萄』（*The Grapes of Wrath*, 1939）と決めていましたが、文学で論文をまとめる自信がなくなり、元々英文法も好きな分野でしたので、卒論は英語学で書くことにしました。そして、大学院進学も決まり、院では英語学を研究する予定でしたが、大学4年の時に聞いた Nathaniel Hawthorne（1804-64）の『緋文字』（*The Scarlet Letter*, 1850）についての私の恩師の研究発表（日本大学英文学会月例会）に触発され、個人によって解釈は多様になるものだと実感した私は、やはり元々好きな文学を研究すべきだと気づいたのです。その恩師の故新倉龍一先生（1925-94）には、その後大学院や職場で大変お世話になりました。先生は、何よ

りも「文学」とは文を楽しむ「文楽」であるべきだというモットーを持っており、作品の一語一語を大切に味わい楽しむ姿勢を大事にされていました。文学の原点は、作品内の生命の言葉に対する読み手の〈感動〉にあるものだと思います。そして、文学研究とは作品に対して自己を打ち立てる孤独な作業を通じて、その〈感動〉を自分の言葉で表現することなのです。私はこれまで Nathaniel Hawthorne や Herman Melville（1819-91）を中心に研究を進めてきましたが、まだまだ浅学非才の身を痛感しています。天才作家たちを理解するには果てしない時間がかかるのは当然のようにも思われます。しかし、それでも研究したいと思わせてくれるアメリカの古典文学の魅力には感謝せざるにはられません。

《検定試験奨学制度》

私と英語

日本大学文理学部英文学科3年 若林 花音

この度、6月に受けたTOEICの結果を報告したところ、英文学会誌に文章を書く機会をいただきました。私がこれまで英語をどのように学習し、試験を受けるようになったかをお話しさせていただきます。

私は幼稚園入園前から英会話教室に通っていました。母が中学校からの英語の学習に馴染めなかった自身の経験から、楽しく、構えることなく英語に触れさせたいと思ったそうです。小さい頃はディズニーチャンネルが好きで、なんとなく英語が生活の中になりました。小学校に上がり、本格的な英会話教室での学習が始まり、小学校3年生の時に先生から英検5級に挑戦してみないかという提案を受けました。そして受験し合格してからは1年に1回のペースで英検を受験してきました。だんだんと級が上がるごとに合格が難しくなり、不合格等挫折もありましたが、中学生の間に2級、高校生の中に準1級合格、と目標を設定して続けていくことができました。その時の自分の英語のレベルを確認できるので試験を受けてきたように思います。現在は大学生の間に1級合格を目標に学習しています。

英検の学習も続けていますが、大学生になると、TOEICが重視されてくるようになりました。英文学科は年に一度の受験が義務付けられているので定期的に受験していましたが、3年生になって就職活動が始まったこともありよりハイスコアを目指して学習し始めました。

今回810点を取得した受験の準備期間には英検1級の受験を並行して準備していました。TOEICに特化した学習というよりは英検1級に向けての学習が結果につながったのではないかと考えています。残念ながら英検1級にはあと少しのところでは不合格となりましたが、これら2つの受験準備期間に行っていた学習方法について紹介します。

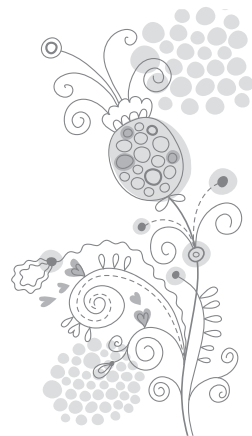
まず日常的に英語に触れる環境を意識的に作るようにしています。簡単なところでいえば携帯電話の言語設定を英語にするとところから始めました。また、英語のポッドキャスト視聴、英語音声・字幕での映画やドラマ鑑賞をしています。これらは英語の学習方法でよく紹介されています。実際にやってみると、日々聞きとれる内容が多くなったり、理解力が上がっていると実感します。自分の好きなコンテンツで学習することは、自分が楽しんでモチベーションを保ちながら学習できるので、継続するためにとっても必要だと感じました。

それに加えて、TOEICや英検それぞれに特化した参考書を購入して学習しています。私の場合はReadingが苦手なので、単語を中心に学習しています。単語中心で単語帳に丸い無地のシールや付箋を使って覚えている単語、まだ覚えられていない単語を見分けられるようにする等、とてもシンプルな方法が現時点では自分の一番の暗記方法です。毎日、ほんの少しの時間を利用すると無理なく続けられます。

また、特にTOEICは時間配分が大切になるので、何回か実際の受験のように通して時間を気にしながら過去問等を解くことが必要です。

そして、今回の受験で個人的に思ったことではありますが、午前受験をおすすめしたいです。今まで時間に余裕を持てる午後を受けてきましたが、午前中の方が頭がスッキリしているように感じました。受験会場に着くまではListening問題等を聞いて練習する方もいると思いますが私はリラックスするためにも自分の好きな曲を聴くのも良いのではないかと思います。会場に着いてからはあまり参考書は開かずリラックスした状態を作ることが多いです。さらに、大体が自由席ですがTOEICのスピーカーは聞こえにくいことが多いように感じるので端すぎず後ろすぎない、音声に問題がなさそうな席を選ぶのも重要だと思います。

私はこれまで英語の学習をもうやりたくないと思うことはなく、英語が好きで楽しく続けてくることができました。これからも構えることなく挑戦していきます。



《年次大会プログラム》

日本大学英文学会 2023 年度 学術研究発表会・総会

日 時：12月9日(土) 13:30 より
場 所：日本大学文理学部 3号館 2階 3206

会長挨拶：吉良 文孝(文理学部教授)

学術研究発表会：13:35～16:30

●語学の部：13:35～14:55
司 会 黒滝 真理子(法学部教授)
[発 表] 1. 村岡 宗一郎(文理学部助手)
2. 島本 慎一郎(文理学部講師)

休 憩：14:55～15:10 (15分間)

●文学の部：15:10～16:30
司 会 宗形 賢二(国際関係学部特任教授)
[最終講義] 高橋 利明(文理学部教授)

休 憩：16:30～16:40 (10分間)

総 会：16:40～17:10
司 会 前島 洋平(文理学部准教授)
[会長挨拶] 吉良 文孝(文理学部教授)
[会務報告] 天海 希菜(文理学部助手)
[会計報告] 一條 祐哉(文理学部准教授)
そ の 他

《年次大会発表要旨》

証拠性の観点から見た知覚動詞 の受動態と原形不定詞の意味的 非整合性について

日本大学文理学部助手 村岡 宗一郎

現代英語における知覚動詞の能動態はその補文に原形不定詞や現在分詞、過去分詞をとり、to不定詞を補文にとる例は一部例外を除いて非文法的であると見なされる。

- (1) a. I *saw* him {*walk* / *walking*} across the road.
(江川 1991³: 333)
b. *Bill *saw* Mary *to eat*. (Nunes 1995: 359)
c. I have never *seen* a dog *beaten* or *ill-treated* in Japan.
(江川 1991³: 351)

その一方で、知覚動詞の受動態はその補文に to不定詞や現在分詞をとり、原形不定詞や過去分詞が後続する構造は非文法的であると見なされる。

- (2) a. *Sandy *was seen leave* early (by Kim).
(Van Valin and Lapolla 1997: 473)
b. Sandy *was seen* {*leaving* / *to leave*} early (by Kim).
(ibid.)
c. *The children *were seen beaten*.
(Palmer 1987²: 199)

このうち、(2a) のように知覚動詞の受動態が原形不定詞と共に起できないことについて、拙論 (2022; 2023) では、原形不定詞補文はその完結性のアスペクト特性を反映した強い直接証拠性を表わす一方で、知覚動詞の受動態は知覚情報の出所である知覚者(主語)が省略されていることから、弱い直接証拠性を表わす表現になると分析した。そして、強い直接証拠性を表わす原形不定詞と弱い直接証拠性を表わす知覚動詞の受動態が共起することで、言語運用上の矛盾が生じるため、(2a) は容認されないと主張した。

その一方で、吉良 (2023) は証拠性を導入せずとも、(2a) の容認可否性は知覚動詞の受動態と原形不定詞のアスペクトによって説明可能であることを示唆する。

本発表では、(2a) の容認可否性における証拠性の分析が妥当であるのかを再検討することを目的とし、アスペクト単体でなく、そのアスペクトを反映した証拠性によって、(2) の準動詞の分布とその容認可否性を説明できることを実証する。

God shines. Furthermore, in the chapter 23 (“The Lee Shore”) Ishmael seeks his Utopia in nature of “the sea” which guarantees “highest truth” and “the open independence” under the guise of Bulkington who avoids “the treacherous, slavish shore.”

Contrary to Ishmael’s “hand,” the tragic heroine, Zenobia’s “hand,” after drowning herself, brings about Coverdale’s radical anxiety. Her dead body seems to resist “Providence” with “never-ending hostility,” with both her hands clenched as if they might suggest “immitigable defiance” rather than in prayer. Zenobia’s “passionate love” once put Hollingsworth’s “hand” to her bosom, but now she cannot help confronting God’s “invisible hand” owing to her own passion.

Here, I wish to argue that the metaphor of the “hand” representing human solidarity is derived from Nature’s (or God’s) “invisible hand” in Adam Smith’s *The Wealth of Nations* (1776). And this sympathetic “invisible hand” corresponding to the divinity of human nature explicated in Smith’s *The Theory of Moral Sentiments* (1759) appears in *Moby-Dick*’s chapter 4 (“The Counterpane”). Ishmael’s strange sensations find in Queequeg something congenial to “a supernatural hand” pertaining to his strange experience in his childhood. Thus, it would be significant for Melville to render pagan Queequeg the embodiment of the “hand,” for Melville seems to seek for transcendental “Nature” that could relativize Christian “God.” Melville’s view of nature is thought to reveal pantheism based on “the inscrutable tides of God.”

Next, by contemplating Gabriel on the Jeroboam who becomes a fanatic, seeking to make himself the Christian God incarnate, we come to notice Gabriel’s congeniality to the fanatical philanthropist Hollingsworth in *The Blithedale Romance* (1852). Consequently, the sin of “a self-deception” in violation of the conscience arises from Hollingsworth’s ideology of philanthropy and Gabriel’s Shakerism. Religious and other ideological fanaticism go hand in hand toward destruction.

According to D.H. Lawrence, we are required to dive into “the deepest self” in order not to slip into “a self-deception,” for “the true liberty” exists there. However, a man has to endure the most solitary self when he reaches that depth. Hawthorne’s solitude seen in “Monody” resonates with that of Melville in the deepest sense. When both authors inquire into loneliness, love and solidarity and grope for their respective Utopias through writing “Nature” by their own writing hands, they put their faith in the “hand” representing Utopia. Ishmael entrusts himself to God’s “invisible hand” with Utopia on the sea in his bosom, but finally he experiences the ruin of Utopia. And Zenobia who resists the “invisible hand”

puts an end to Utopia on the land for which she longs. The denouements of these narratives attest that “utopia is located in the imagination, not reality” as Leeuwen mentions, and therefore Hawthorne and Melville intensely devote themselves to Utopias of writing “Nature.”



《月例会関連》

●月例会予定

2023年度11月以降の行事予定は以下のとおりです。詳細が決まり次第、メールおよび、本学会ホームページにてご案内いたします。

11月 研究発表(2023年11月25日)

司会 飯田 啓治朗(文理学部教授)

発表

1. 都市の無名性という名のミステリー小説
—ウィリアム・アイリッシュの「消えた花嫁」を読む—
堀切 大史(文理学部准教授)
2. A Label is the Property of an Edge rather than a Node
賀美 真之介(文理学部講師)

12月 2023年度学術研究発表会・総会(2023年12月9日)

詳細は《年次大会プログラム》をご覧ください。

《事務局だより》

●卒業された同窓会員の皆様へ

日本大学英文学会では、会員・非会員にかかわらず、卒業後は同窓生として英文学科全卒業生の個人情報とを保管しております。住所変更など、ご登録情報に変更がございましたら、学会通信日次に記載されている宛先までお知らせください。

●会費納入のお願い

2023年度学会費(研究会員4,000円、同窓会員1,000円)を同封の郵便振込で納入くださいますようお願いいたします。なお年次大会受付を含む事務局での現金による学会費納入はお取扱いできません。学会費納入には、お手数ですが、郵便振込をご利用いただきますようお願い申し上げます。

口座番号: 00140-3-27474

加入者名: 日本大学英文学会

※日本大学英文学会会則により、年度末時点で3年間会費未納の場合には自動的に退会となります。

●研究発表者募集

当学会では、次年度の月例会(シンポジウムを含む)・年次大会の発表者を募集しております。発表をご希望の方は、以下の情報を事務局までお寄せください。なお、検討の結果、ご希望に添えない場合がございます。予めご了承ください。

1. 氏名
2. 住所・電話番号・メールアドレス
3. 所属
4. 発表希望年月
5. 発表題目
6. 要旨(日本語400字以内、英語200語以内)

●『英文学論叢』第73巻 原稿募集

日本大学英文学会機関誌『英文学論叢』第73巻(2025年3月発行予定)の原稿を募集いたします。投稿をご希望の方は、『英文学論叢』第72巻(2024年3月発行予定)巻末の投稿規定をご覧ください。

●学生編集委員

英文学科3年	秋元	優志
英文学科3年	小澤	優月
英文学科3年	塩澤	拓幸
英文学科3年	鈴木	大翼
英文学科3年	高橋	尚吾
英文学科3年	田原	希優
英文学科3年	樋口	康平
英文学科2年	横田	涼

